

## 論文二一ノ五

# アトウギア伯爵夫人マリアナ・タヴオラの回想録

1/27

## 第一節 タヴオラ侯爵夫妻の栄光とアトウギア伯爵夫人の前半生

一九一六年スペイン西北部の都市ポンテヴェドラで、十八世紀リスボンの貴婦人マリアナ・ベルナルダ・タヴオラの遺作『アトウギア伯爵夫人の回想録―未公開自筆手稿』が上梓された。彼女は一七二二年屈指の名門タヴオラ侯爵家の長女として生まれ、三三歳のとき姻家のアトウギア伯爵御殿で大地震に襲われ、そこには女性の筆による稀有な被災記録が含まれる。しかし、牢舎の木材に刻まれた第四代アロルマ侯爵の『獄中記』とともに、国王暗殺未遂事件の謀議者とされるタヴオラ一門の冤罪を訴える証言として重要な史料とされる。①

いわゆるタヴオラ事件、国王ジョゼ一世を暗殺し、第八代アヴェイラ公爵を即位させるとの陰謀が発覚するや、国務尚書カルヴァリオの指令によってマリアナの両親たる第三代タヴオラ侯爵夫妻、兄弟であるルイス・ベルナルドおよびジョゼ・マリア、さらには伴侶の第十一代アトウギア伯爵が犯行の謀議者として逮捕され、姻戚のアヴェイラ公爵とともに惨殺の極刑に処せられた。また、カルヴァリオ政権への批判的勢力と目される義弟の第四代アロルマ侯爵や叔父のリビエラ・グラランダ侯爵は投獄される。マリアナ・ベルナルダ自身も、三人の幼児とともにマルヴェイラのマルチレス尼僧院へ護送され、カルヴァリオの失脚に至るまで二十年間監禁された。② なお、

2/27

① Zulmira C. Santos, *Entre Malagria e Pompal: as «Memórias» da última Condessa de Atouguia, Peninsula*.  
*Revista de Estudos Ibeicos*, No.2, 2005: p.401.

② Marcus Cheke, *Dictator of Portugal*, London, 1938, pp.112-113, 127-128, 146-147.

第四代アロルマ侯爵ジョン・デ・アルメイダと結婚した次女レオノーラも、三人の愛し子とともに別の尼僧院に送られた。その長女レオノール・アリメイダ、のちのアロルマ女侯爵IIエイハウゼン伯爵夫人は、一門の悲運のなかで自己を錬磨し、やかつて著名なロマン派女流詩人として広くヨーロッパ諸国で知られ、ポルトガル女王マリア一世の側近として十八世紀末葉の宮廷サロンをも主宰する。

総頁九十に及ぶ自伝的著作『アトウギア伯爵夫人の回想録』は一七七七年頃に手稿が仕上げられ、近親の貴族や国外のイエズス会士の間で回覧・保存された。一九一六年の初版についてまもなくポルトガルでも再版されたが、それらは現在入手困難な稀覯書に属し、タヴォアラ事件に係わる後半部三十頁のみ『ポルトガル歴史史料人物編』として近年デジタル公開された。また、二〇〇五年ポルト大学ツルミラ・C・サントスによって論文「第一代アトウギア伯爵夫人の回想録―マラギルダとポンバルのはざままで」が執筆され、『伯爵夫人の回想録』刊行の複雑な経緯とともに全編の内容が綿密に紹介された。なお、同書に含まれる大地震被災の証言は、ソーサの原著『リスボン地震―その人口学的研究』にまず収録され、リスボン近郊への避難とイエズス会士への帰依を含む原文は、マラグリダ神父のタヴォアラ家宛書簡とともに、一七三六年『リスボン古文書館月報』に記載された。タヴォアラ一門家長の父フランシスコ・デ・アシスは第二代ハヴォール伯爵の子息であり、従妹レオノーラと結婚により第三代タヴォアラ侯爵として叙位された。一七五〇年彼は第三代アロルマ侯爵の後任、インド副王に任命され、大地震の二カ月前まで植民地行政を統括した。軍人および政治家として多大の功労に輝く彼は、義兄の第

八代アヴェイロ公爵とともに国務尚書カルヴァリオの強力な政敵でもあった。① 一七四九年までリスボンで暮らした英国大使ベンジャミン・キーンが、後任のアブラハム・カストレス寄せた書簡には、インドへの赴任を直前にしたタヴォアラ伯爵夫妻についてつぎのように誌される。

スペイン駐在英国大使キーンの書簡

一七五〇年一月三〇日付ポルトガル駐在英国大使カストレス宛

タヴォアラ侯爵に会われたら、キーンとの想い出はいかがとお尋ねください。私としては閣下が懐かしく、ポルトガル貴顕のなかではもっとも学識豊かで、温厚な人物と尊敬しています。本土におけると同様、海外においても優れた功績を積まれるでしょう。

一七五〇年二月八日付ポルトガル駐在英国大使カストレス宛

タヴォアラ侯爵の近況に接し、感謝致します。敬愛する親友から饒別の言葉が届けるとお伝えください。侯爵夫人は女傑であります。私が国王であれば、彼女には同行させません。侯爵の不在中に万事を処理できる代役、彼女ほど適切で有能な代役が得られるでしょうか。②

① Cheke, *op.cit.*, pp.111-113.

Mariana Beriana de Tavora, *Memorias da ultima Condessa de Atouguia. Manuscrito autographico inedito.* in Zulma C. Santos, *op.cit.*, p.406.

② Benjamin Keene, *The Private Correspondence*. London, 1933. pp.202, 204.

マリアナ・ベルナルダの母、侯爵夫人レオノーラ・デ・タヴォーラは、ジョアン五世晩年の宮廷で美貌と才知を讃美されるとともに、イエズス会士マラグリダの熱烈な信奉者であった。キーンから『女傑』と評されたこの貴婦人は、後年国王暗殺の首謀者として処刑され、悪女とのイメージが流布されたようである。若くして七年戦争に従軍し、軍事使節としてヨーロッパ列強を歴訪したフランス国王軍の将校チャールズ・フランソワ・デュムリエの評言を訳出する。

タヴォーラ侯爵夫人はヨーロッパ最高の美人のひとりであって、卓越した天分と雄志を抱き、正邪いずれの事業にも有能であった。その激しい気質、傲慢な態度、辛辣な嘲弄が宮廷において恐怖の的であった。カルヴァリオの宿敵である侯爵夫人は公言し、彼への非難を繰り返した。国王にも特別の敬意は示さず、君主としての公務をも擲<sup>や</sup>擲<sup>ゆ</sup>するのであった。王妃と王女も渡り合う仲間にすぎない。この怖るべき女が大勢の追従者に囲まれ、巨大な財富と強力な閹閥に援護される。豪華な装い、優雅な暮し、端麗な容姿によって民衆を魅了し、彼らを巧みに操縦したのである。

デュムリエ著 『報告 ポルトガル一七六六年』(一七七六年) ①

第三代タヴォーラ侯爵フランシスコ・デ・アシスとその妻レオノーラとの間に生まれた男女十三人のうちで七人

① Charles-Francois Dumouriez, *An Account of Portugal, as it appeared in 1766*, Lausanne, 1775, pp.230-231.

は夭折した。長女マリアナについて一七二四年に誕生した長男ルイはやがて爵位を相続し、一歳年上の叔母、テレーザ・デ・タヴォーラと結婚する。これらの公子公女が育ったジョアン五世の御代には、ブラジルにおける金鉱開発と砂糖生産を財源として豪華なバロック文化が開花し、第三代タヴォーラ侯爵夫人は美貌と才知によって華やかな宮廷の明星として輝いた。王侯貴族の遊樂は種々の祝賀や催事に止まらず、水辺での舟遊び、山野での狩猟、さらには広場での闘技にまで及んだ。一七二〇年代ポルトガルに滞在した自然学者シャルル・フレデリック・メルヴェイユは、闘牛の場におけるリスボンの歓楽と熱狂を詳しく語る。

リスボンに到着すると、闘牛祭の準備が王宮広場でなされるのを、興味深く眺めた。この広場は壮麗であって、王宮の正面全体には円形劇場が造営され、各階に多数の観客席が組まれる。階上のバルコンは王宮上階の窓口へ通じる。上階の大広間では侍従長アブランテス侯爵が采配し、貴顕の女性すべてを着席させるため、その窓辺に大バルコンが設営された。彼女らの光景はとくに美観であるときれ、個々の麗姿を確認するのは難しいが、全体の情景も素晴らしき絶景である。ポルトガルの貴婦人は装身具、宝石、花飾りにとりわけ気を配り、入念に髪を調えるので、ここでのバルコンほど絢爛たる錦絵を他国で見ることはいかない。彼女らの華やかな装いを自由に見詰め、妨害されぬ唯一の機会である。眺望に適した座席を占めたので、携帯のオペラグラスが役立った。祖母の家名に因んでロレーヌと愛称される娘が、若々しい美貌に輝き、婦人席全体で際立った存在であった。その母親も格別の美人である。魅力的なロレーヌが婚約したのは、宮廷の最高実力者、アブランテス侯爵の子息との由。この縁組を成就させるには、彼自身が多大の負担を覚悟せねばならぬ。ふたりは二年以内に結婚すると噂されるが、私は難しいと思う。(中略)

側近を従えて国王がバルコンへ入場すると、闘牛祭が開幕する。その瞬間溢れる群衆の歓声で王宮広場は耳を聳する。広場の周辺にも大きくは五階建の高楼が仮設され、すべて絹布やタピスリで飾られる。これら高楼に整列する黒人の群れが、アフリカ風にトランペットを吹奏する。かくして衆多の歓声と叫喚に楽団の演奏が加わり、熱狂が燃え上がる。闘牛の試合自体よりも私は、観衆の狂喜乱舞を見るのが好きである。(中略)

いよいよ乗馬した数名の騎士が登場し、国王に敬礼する。表敬のため、騎馬にもはつきり低頭させいよいよ乗馬した数名の騎士が登場し、国王に敬礼する。表敬のため、騎馬にもここで低頭させる。ついで闘牛を行う広場中央に、子どもの立姿を模した起き上り小法師と、ピラミッド型の大箱が各々数個配置される。怒れる雄牛が放たれるや、これら小法師はつきつきと転覆され、すぐさまみな立ち上がる。これが牛の怒りに油を注ぎ、観客を熱狂させる。大箱も覆され、そこに隠された小鳥、野兎、猫、飼兎が飛び出し、動きまわる。怒り狂い、咆吼する牛が、鳥や兎に襲いかかるが、難なく逃げられる。ついに広場の片隅騎士の姿を認めた。彼は雄牛を待ち受け、その突進をかわし、角と角の間に短槍を打ち込む。即座に牛は倒れ、騎士に凱歌が挙ったのである。①

メルヴェイユ著『ヨーロッパ諸国に旅する人への訓話的回顧』(一七三八年)

① Charles Frédéric Merveilleux, *Mémoires instructifs pour un voyageur dans les divers États de l'Europe*, Amsterdam, 1738, tome second, pp.130-135.

タヴォラ侯爵家の長女として生まれた長女マリアナは、早くも七歳のとき同じく由緒あるアトウギア伯爵家への婚約を定められた。縁組の相手ジェロニモ・デ・アタイデ、のちの第十一代アトウギア伯爵もいまだ八歳にすぎない。この縁談には多々支障が生じたらしく、挙式に至るのは一七四七年マリアナ二五歳の冬である。同家へは十七世紀末葉彼女の叔母にあたるマリナ・テレザ・デ・タボーラが嫁ぎ、第九代伯爵夫人として一七四五年まで存命した。

嫁ぎ先アトウギア伯爵家の起源は大航海時代の開幕に遡り、エンリケ航海王の側近にして、一四一九年マデイラ島を発見したジョアン・ゴンサルヴェス・ザルコが始祖とされる。以後同島を領地とするゴンサスヴェス家に、十五世紀中葉国王アフォンソ五世は爵位を授け、エストレマドウラ州の沿岸部ベニシエおよびアトウギアの併有に封じた。この地方は風光明媚なカルヴェイロ岬を中心に古来有名な漁場であり、穀物や果実の栽培に適した内陸部は、レース織りの産地としても知られる。この地において領主アトウギア伯爵には、一定の裁判権と徴税権が賦与され、食塩、共同炉、風車などの販売が認められた。①

一六四〇年十二月一日リスボンの貴族・知識人・聖職者の志士四十名は、リベイラ王宮を襲撃し、六十年に及ぶスペインの支配を打倒した。この結社は徴兵と租税の重圧は募る一六三七年ころから始められ、ブラガンサ侯爵の王位擁立と商工業者への連携を確約して、討ち入りの直前十一月二十五日と三十日にロシオ広場アンタオ・ダルマダ邸において最後の誓約が行われた。陸軍将校である第四代アトウギア伯爵ジョアン・ゴンサルヴェス・アタイヤデも、重要な志士としてこれに連判しつつも、決行の前年六九歳で逝去し、ふたりの子息ジュロニモスとフランシスが襲撃に参加した。同伯爵と妻フィリップ・ヴィルヘナの外孫ルイス・ダ・メンゼス、のちの革新的政治家第三代エリセイラ伯爵は、若冠八歳にして革命に連帯し、大著『ポルトガル再独立史』に簡潔な証言を

誌す。① なお、同時代の史書に記録された第四代アトウギア伯爵夫人の祖国愛は、十九世紀前半著名な文学者アルメイダ・ガレットによって戯曲化され、一八四〇年リスボンの大劇場テアトロ・ド・サリトルで上演された。この作品は一九八八年にもポルトガル国営放送によって脚色と放映が行われた。

アルメイダ・ガレット著『戯曲フィリップ・ヴィルヘナ』第二幕第六場

フィリップ・ヴィルヘナ「我が同志よ、我が息子よ！神の定めによりこの世に生きる活力と支援をすべて奪われた私がここにあります。母なる我には、つねに慈しみ、護るべき子があり、亡き夫の名誉と追憶が脳裏に刻まれています。けれども、神は私の信仰を深め、神意に従うよう命じられました。神はこの胸にポルトガル女性の魂を覚醒し、強力な援護と防衛を配する、と申されます。荣誉に輝く伝統をアトウギア家の一員として継承し、伴侶の早過ぎる死による責務を果たすべき使命から、妻ヴィルヘナが逃避したとは世間に言わせません。祖国に必要な事柄すべてに、率先して私は全身全霊を捧げます。息子もここにおります。唯一の宝です。(ヴィルヘナは立ち上がり、息子へ腕を広げる。) さあ、わが子よ、跪拝しなさい。(息子を抱擁する) ここに神と祖国の祭壇を拝し、純真かつ敬虔に身を捧げる、と。神よ、ご支援ください、凱歌を挙げようように！ああ、万感胸に迫り、落涙を止めません。お許しください。母と子が別れを惜しむのです。(祭壇に置かれた剣をヴィルヘナは握り締め、一同に告げる。) これなる剣は女人に手にあまるものです。

① Edward McMurdo, *The History of Portugal From the Reign of The Joao II the Reign*, London, 1889. Volume III, pp.368-369.

しかし、壇上に飾られた肖像も私を激励し、あらゆる能力の創造者、あらゆる活動の起動力として私たちを加護される救世主が、か弱き女の腕と胸を力づけます。跪拝しなさい、息子たちよ！そなたらの父祖は、剣術の達人ながら勇壮な騎馬戦士であり、戦場では股肱の士として国王を扶けました。(涙を抑える。) 母なる我はそなたら愛し子を、先程ほどまで子守歌で守り、腕に抱えしに、いま悲嘆の淵に立ちて、超自然の不可解な気力で辛うじて身を支える有様です。母なる我が愛し子に武器を授け、父祖と等しく立派な騎士であれ、と祈ります。神の命を受けたと確信し、そなたらに剣を持たせ、厳かに指示します。ジェロニモ・デアタイデならびにフランシスコ・クチンホよ、神の摂理と父祖の大義に従い、そなたらを騎士に武装します。剣を握り、宗教と祖国の防衛、民族の解放と正当なる君主のためにのみ、それを振いなさい。(息子たちに剣が渡される。従者が帯剣を手伝い、ヴィルヘナはその帯を締める。そして、愛し子へ胸を広げ、涙ながらに言う。) 我が子よ、抱擁を！」①

『アトウギア伯爵夫人の回想録』は、一八世紀ポルトガル女性の痛切な精神的自伝でもあって、その前半にはポルトガル宮廷の黄金時代に過した娘時代の回想も含まれる。リスボンの豪奢と遊樂のなかで才色兼備のタポラー一族が注目的となり、彼女ら自身もそれに没入したことは不思議でない。しかし、多感なマリエラの回想では、流俗や遊樂に浸ることへ罪悪感も語られる。こうした部分については前述、ツルマニア・サントスの論文を参照する。

① Almeida Garrett, *Filipa de Vilhena*, Lisboa. Kindle, 1027-1048/1566

「一七三七年十五歳のとき、」とマリアナは語り始める。「父がエルヴァス連隊曹長であったため、都市エルヴァスの地位に邸宅を構え、当地へヴァランシーノ伝道団が布教に來ました。母が説教を聴くのに熱心で、いつも私は同伴しました。しかし、お談義は退屈なので、出たくないと言おうと、頼むから今度だけは来てほしい、と母が答えます。諦めた私は、期待も反発もせず、出かけました。その日の布教は素晴らしく、学識に富み、深く訴えるものでした。説教されたのは、現在アルガルヴェ大司教であられるロレンソ神父です。」(中略)

イエズ会士ガブリエル・マラグリダに帰依する以前、十五歳から三三歳までのマリアナは、キリスト者としての義務を果すことよりも、貴顕たる品位を身に付けること、貴族の財富や安楽を尊重することに心掛けた。それらは宮廷の慣行や伝統的家風の細部にわたり、一七六八年ボンバルによって禁止される政略結婚も王侯貴族の連帯を強める方便であった。

一七三七年当時ロヴェラトジョ伝導会の布教師レンス神父やルレンソ神父の説教に接し、十五歳のマリアナは、宗教的な自覚を覚え始めた。「罪への危惧ではないまでも、空しさを感じるのです。それでも若者同士の遊樂を好んで、黙禱を退屈に思い、樂しめる日を待ちます。」聴罪司祭が交代し、「凡庸な告解を続けたため、祈る氣持が著しく減退し、なおかつ神への怖れも罪の痛みも感じないのです。」①

ツルミラ・サントス「第十一代アトウギア伯爵夫人の回想録

① Santos, *op. cit.*, pp. 405-406, 410.

「マラギルダとボンバルのはざま」(二〇〇五年)

第十一代アトウギア伯爵と二五歳のとき結婚したマリアナは震災までに、長男ルイなど六人の子を育てた。バiao副王に就任した第十代アトウギア伯爵に伴って、ブラジルへ赴任し、早世した義母の代役をも勤めて、洗練した趣好や社交を發揮した。

彼女の「快活な氣質」は氣儘な楽しみから、貴族社会での悅樂へと向かった。やがて夫であるアトウギア伯爵は「妻の資質を華やかな社交にふさわしい」を感じ、「優雅に着飾る」よう勧める。かくして義父の第十代アトウギア伯爵ルイス・ペリグリオがバiao副王に任命されと、同家に藏される沢山の宝飾を当地に運び、この「華麗な貴婦人」に然るべき役割を演じさせた。「長男が生まれた一年後も、」と伯爵夫人は語る。「バiao副王たる義父の指示でこうした役割で勤め、外交的な成功に寄与しましたが、当人には嫌悪の連続でした。」

ツルミラ・サントス、前掲。

①

やがてジョアン五世が逝去し、ジョゼ一世治下のもとに國務尚書カルヴァリオが王政の実権を掌握する。一七五四年インド副王の任務を終えて実父タヴォウラ侯爵が帰国したが、彼の功績に宮廷は冷淡であった。時代が推移

① Santos, *op. cit.*, p. 410.

するなかで、タヴォラ侯爵夫人はイエス会士マラグリダへの崇敬を深める。

イエス会会の重要な礼拝、聖イグナチオ『靈操』の祈禱に、タヴォラ侯爵夫人は精励し、この母親にマリアナはたえず付き添った。ただし、かつてヴァラントジョ伝道会の布教師、ルレンソ神父の説教に感銘を受けた彼女自身は、その後いかなる聴罪司祭によっても信仰を深めることはなく、「服飾や遊楽」に没頭したのである。さらにマリアナは言う。音楽、なかでも歌唱とクラヴサンを熱愛し、しばしば「不遜にもミサへの参列を怠り、気持が晴れるようクラヴサンに合わせて歌いました。」それでもときには不安に憑かれ、「聖母マリアへの月例ミサに参じ、土曜日にはマドレ・デウス尼僧院まで遠出して、貧者への慈善に協力しました。」(中略)

『アトウギア伯爵夫人の回想録』においては宮廷の伝統的な技芸と自己の文化的意欲の合致が、美事に記録される。遊楽に伴う芸事は精神的・道徳的向上に資する労苦と等価なのである。「幼いときから」と彼女は断言する。「音楽を愛し、なによりもそれが喜びを与えてくれました。アトウギア伯爵の狩猟熱で支払が嵩み、家計に窮したのに比べれば、たんなる趣味にすぎぬ私の音楽は、身の破滅に至るものではありません。」

ツルミラ・サントス、前掲。

①

① Santos, *op.cit.*, pp. 411-412.

一七五〇年以降のポルトガル宮廷では王権の中樞が国務尚書カルヴァリヨへ移行するものの、アヴェイラ侯爵、タヴォラ公爵、アロルナ侯爵などの名門貴族が、なお多大な勢力をなしていた。ジョアン五世晩年の禁欲的な謹慎が解除され、国政よりも遊興や狩猟を好む国王の登場によって、上流階級の奢侈と遊惰はむしろ倍加したであろう。テージョ河畔での豪華な宴会や学芸サロンを高雅な貴婦人が活気づけるとともに、享樂の地として著名なオベイラスの尼僧院において、王侯貴族の社交や外国使節の接待が日々営まれた。英国海軍の提督ハーヴェイは、伊達男としてヨーロッパ諸国の宮廷で人気を博し、一七五二年頃からリスボンでポルトガルの貴顕と親交を結んだ。精細な彼の日記によって震災直前のタヴォラ一門の女性を垣間見よう。

『英国海軍提督オーギスタス・ハーヴェイの日記』

一七五二年五月 リスボン

余は足繁くオデイヴェラスの尼僧院へ行き、旧知の人たちと親交を暖めた。ヒル夫人がふたたび院長の職務に就かれ、当地のイギリス人修道女とも会った。ジョアン・デ・ベンボスト公のご母堂マリアンナ・デ・ソーサ様が大規模な歓迎陣をそこに待機させ、招集可能な美人すべてが余を歓迎すべく門前に並んだ。この日一七五二年五月十八日は余によってもっとも楽しい夕宵となった。ジョアン公が約束されたとおり、先王に愛顧を受けたエレーナなる老女が案内役であった。アトウギア伯爵夫人への紹介状を書くに彼女は約束されたが、ついに受け取ることなく、不首尾に終わった。しかし、エレーナは際立つ麗人を窺越しに眺めさせ、宮廷槍兵長の娘であるが、逢い引きの手配をします、と言った。五月三十日の夕方ほかの美女、アントニオ・サルタラ・<sup>マ</sup>・メンドサの妹君から、某所でお待ちします、との手紙が届いた。こうした駆け引きに忙殺

され、日々無為に終わったのである。

一七五三年十月―十一月 リスボン

十月二十六日夕宵宮廷でオペラを観劇した。ジオアチノ・ジジェロのソプラノ、ジオヴァニ・マンズオリとアントニオ・ラーフのテノール、女役第一ドメニオ・ルチアニ女役第二ジュスツピ・ガリシニ。十一月四日華麗な国王特別広間で前述の歌手と小管弦楽団によって歌劇が上演され、そこに余は招待された。少数ポルトガル貴婦人がそこに着席し、男性の観客はほかにいなかった。察するに国王は若きタヴォラ侯爵夫人と親密であって、彼女のため企画されたのである。

十一月七日ジョアン・デ・ベンボスト公のご母堂に誘われて、サンタ・アンヌ尼僧院を訪れた。修道女は美人揃いで、マリア・ペレグリニアなる女性がとりわけ魅力であった。マリア・フェリス嬢、イザベラ・カエタノ嬢、ブラジ・テレザ嬢もみな稀有な美女である。遅くまでそこで過した。

一七五四年二月 リスボン

二月十日。オディヴェラスのセラス尼僧院窓格子へ行く。そこにアトウギア伯爵夫人がおられ、天使のごときお姿であった。ほかにも大勢の女性がいた。遅くまでそこで過して帰宅した。この日特筆すべき出来事はない。評判の娼婦ふたり、マリア・ジョセファと年増のエレーナを待らしたが、それほどでもなかった。サン・タンナ尼僧院のマリア・ペレグリニアから数度手紙が届き、彼女もときに格子窓に現れるので、そこにも行った。セラス尼僧院へはマヌエル親王と同行し、マルゲリタ様の歌唱を聴くためである。五月二日ホルシユタイン公女から書簡を受け取り、小部屋とともに一夕を過した。彼女も美人であるが、やや肥り気味

である。体力をつけるため、フランス大使のもとで食事をした。①

## 第二節 首都近郊カンポ・ペキノへの避難

マリアナが被災したりビエラ王宮西北のマルチレス教会教区には、アトウギア伯爵御殿をはじめ、はコルト・レアル宮殿、ラフォエス侯爵御殿、タヴォラ侯爵御殿、サン・ミゲル伯爵御殿など王侯貴族の豪邸が連なる。一七五八年ポルトガル王権の指示で実施された教会教区震災調査には、破壊された豪邸の名称が列記される。

大地震によって以下の御殿が被害を受けた。すなわち。ブラガンサ宮殿、コレト・レアル宮殿、リベイラ・グランデ伯爵邸、ヴィミエイロ伯爵邸、バルバセンス子爵邸、サン・ミゲル伯爵邸、タヴォラ侯爵邸、アトウギア伯爵邸、ジョゼ・ダ・シルヴァバスハ邸、ペロロ・カブラル・デ・ラシルグ邸。

リスボン、一七五七年四月十一日 教区司祭 ロドリゲス・レイタオ ②

オラトリオ会の聖霊修道院はアトウギア伯爵御殿が位置するノヴァ・ド・アルマダ街には、オラトリオ会の聖

① *Augustus Hervey's Journal, edited David Erskine, London, pp.121-122, 152-153, 165.*

②



靈修道院も屹立した。同修道院の倒壊と焼尽を綿密に記録した修道士ポルタルは、近隣の豪邸についても簡潔に伝える。

タヴォラ侯爵御殿の倒壊によって、多数の人々が瓦礫の下で絶命し、侯爵夫人はまだ寢室で臥しておられた。殿閣の壊滅されるとともに、珍重する家財だけでなく、インド副王として当地で入手された宝物も灰燼に帰したのである。同侯爵の甚大な被害と年来の多大な功勞に鑑み、国王陛下はベイラ州総督に任命された。アトウギア伯爵御殿でも地震とともに大火に襲われ、激烈な火災で豪邸は全焼し、貴重な財貨が失われた。若干の障壁は残るものの、破損と燃焼と変色が著しく、すべて造り直す必要がある。①

リスボン大地震の記録は國務尚書カルヴァリョに比較的近い聖職者や知識人によるものが多く、彼の政敵であるタヴォラ一門やイエズス会に関する報告は僅少である。マドリッドに駐在する英国大使キーンは、カステルスに当たった十二月六日付書簡で旧友タヴォラ侯爵の安否を憂慮し、同じく同月十九日書簡で「タヴァアラ侯爵の奇蹟的な脱出」を祝福した。同家では従僕など数名が圧死しており、侯爵夫妻も危急に曝されたと思われる。

重い罪過とは考えないまでも、社交や遊樂への没入に不安を感じ、信仰への道を模索するマリアナに一七五五年十一月一日世界が突如転覆し、荒野に投げ出される。以下『アトウギア伯爵夫人の回想録』の原文を訳出する。

① Portal, *historia da ruina. in Sousa, op. cit.*, p.610.

『アトウギア伯爵夫人の回想録』その一

大地震に襲われながら、我が身も我が子六人も、アトウギア伯爵も義父も、そして私の両親と兄弟も六人の我が子も、家財よりも生命を護り、神の慈愛によって死を免れました。アトウギア伯爵御殿とタヴォラ侯爵御殿のすべては地震で破壊され、さらに火災で焼尽しました。金庫、家具、食器の一切を失い、身につけた衣類だけが残ったのです。伯爵夫人たる母は揺れ始めたときベッドにいて、必死に下着だけ纏い、裸足で脱出しました。サンタ・カテリーナ教会の門前まで逃げ、居合わせた紳士が見かねて上衣を貸されたのです。生ける両親と家人を目にしたとき、大切なものが護られたので、これ以上は望むまいと自戒しました。露命を繋げるだけでよいのです。金銀も惜しくありません。

脱出した私たち全員は徒歩でカンポ・ペキノへ辿り着きました。そこには豪壮な屋敷を擁するタヴォラ伯爵家の所領があります。すべて無惨に破壊されたため、所領の空地に仮設小屋を組み、すべての被災者と同じく、長期間不便を忍びました。

見渡すかぎり絶望の淵、惨状の野にあって、さらなる余震に怯え、たえず死に直面しながら、神の怒りが鎮まるよう、信仰を深める決意を私は固め、自分を問わず他の人々も同じ願いながら、その方途を知らず、実行できません。徳操高き告解司祭によって篤信の道へと導かれ、神に仕えるもとを願いながら、だれに従うべきか判りません。「いかなる聖者に」と私は煩悶しました。「神の僕となれるであろうか。」

大地はさらに揺れ動き、なおも危機が続くので、気力ある人は土壁の小屋を立て始め、実父と義父の協力によって、両家のためリベイラ・グランデ伯爵の庭園に仮設住宅を造りました。同伯爵は私の叔父であり、のちにジュンケイラ牢獄に監禁されます。叔母である伯爵夫人ロレーナは敬虔なキリスト者であられ、あた

かも修道院におけるごとく、自宅でつねに聖体拝領を行い、定期的に黙禱も捧げるのです。これが善き模範となつて、大所帯たるリベイラ・グランデ家一同が叔母に倣っています。以前からこの様子を私も存じており、好ましく思いながら、同調する気持は抱きません。①

当時五五歳の家長第十代アトウギア伯爵ルイスデ・アタイデは、バイア副王の任期を終えて同年八月、ブラジルから帰国したばかりであった。その子息第十一代アトウギア伯爵ジェロニモ・デ・アタイデは三四歳、妻マリアナとの間には三男三女の子宝に恵まれた。全壊する自邸から夫妻は、六歳の長男ルイズをはじめ、フランシスコ、レオノール、ローザ、クララ、アントニオなど幼児六人を連れ添い、必死に脱出したのである。マリアナが避難したカンポ・ベキノは、シアード地区から直線で約六キロ、リスボン北端の広大な緑地である。そこに備わるアトウギア伯爵家の別荘と、姻戚リベイラ・グランデ伯爵の広大な別邸を目指した。建物の倒壊で遮断された大道や瓦礫の累積に埋もれた小路も避けて、どれほどの時間と労苦を擁したであろうか。②

被災したアトウギア伯爵御殿は、シアード地区のカビデス街西側、ボア・ギアゲム街東側を占め、間口二二メートル、奥行一五・四メートルであった。小道を隔てて、フランシスコ拱門街にも同家の地所はあり、その片端

① Mariana Beriana de Tavora, *Memórias da última Condessa de Alouguia, em Arquivo Nacional, no.158.*

Lisboa 16 de Janeiro de 1935.p.54.

② Estado do Brasil-Governadores e Vive-Reis, Bahia, 1548-1822. p.3. online.

Santos, *op.cit.*, p.404.

はシアード街に至る。御殿の北側は聖霊修道院の僧坊、また南側はタヴォラ侯爵御殿に面していた。したがって、アトウギア伯爵夫人マリアナの実家と嫁ぎ先は隣り合わせであったことが判る。①

一七二二年に生まれた第四代リベイラ・グランデ伯爵ジョゼフ・ダ・カマールは、大航海時代からの基地、ミゲル島の総督を勤め、大地震のあと王権主導の祈禱行進にも参列したが、その二年後四四歳で逝去した。一七二八年タヴォラ家から嫁いだその夫人ロレーナが、マリアナの叔母にあたる。

シアード地区マルチレス教会に對面し聳え、震災で破壊されたリベイラ・グランデ伯爵御殿は、豪壯な殿閣として著名である。裏庭からは遙かにテージョ河口を眺望でき、門前は文人墨客に古来愛されたバロック街に通じる。一五八〇年スペイン国王フィリップ二世はポルトガルを併合し、サン・ミゲル島総督に任ぜられた初代ヴィラ・フランカ伯爵が、最初の住人となった。第三代ヴィラ・フランカ伯爵は、一六四〇年スペインからの再独立に際してブランガンサ侯爵の王位擁立に尽力し、新たにリベイラ・グランデ伯爵家を開祖する。一八世紀初頭スペイン継承戦争に従軍した第三代リベイラ・グランデ伯爵ルイス・マヌエル・ダ・カマールは、やがてフランス駐在大使に任命され、七年間をヴェルサイユで過ごし、ヨーロッパ列強の和平に貢献した。

シアード地区のリベイラ・グランデ伯爵御殿はしばしば外国使節の接待や国際的な祝宴にも利用された。一七二一年スペインの王女マリアナ・ヴィトリアとジョアン五世の第一王子(のちのジョゼ一世)との婚礼が行われ、その祝賀にここでは十月十三、十四、十六日の夕べイタリア風田園劇が演じられ、バイオリン、オーボエ、クラリネットによる合奏と打ち上げ花火がフィナーレとして供された。また、同年十二月にもスペイン王太子オスト

① Julio de Castilho, *Lisboa antiga, Lisboa, 1889, tomo VI, pp.152-153.*

リアス(のちのフェルナンド六世)とジョアン五世の王女マリア・バルバラの結婚を祝って、スペインの歌劇『新しき恋の武器』が公演され、ポルトガルの貴顕多数と各国の外交使節が観劇するとともに。祝賀する民衆すべてに大量の菓子、果物、冷菓、飲料が下賜された。以上シアード地区の豪邸にかかわる記述は、カステリヨ著『リスボン古蹟』に依拠するが、この著者はリベイラ・グランデ伯爵御殿の相続者、メンデス・モンテイロから故事を聴取したと言う。①

---

① Julio de Castilho, Lisboa antiga : i. Obairro alto de Lisboa 1879. Lisboa 1879.